

連載

79 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義 (65歳・内科)

在宅介護の場所(空間)は、人生の交差点
ドラマは患者さんの家族と介護医療スタッフにまで及ぶ

平成12~13年ごろといえば、介護保険を開始したころです。

そのころ、当院でのデイケアに参加された方の中に、TYさん(現在98歳の女性、アルツハイマー

型認知症・廃用症候群)がいました。TYさんは、同居の娘さんが仕事で日中家を出ているため、24時間365日の



在宅医療提供を希望されました。

介護職ヘルパーさんとともに、誤嚥性肺炎の早期診断と転倒打撲症などの適切な治療を行いました。それは、まるでご自宅が老人病院のようでした。しかし、平成24年ころ突然、娘さんが脳出血で帰らぬ人となってしまいました。後に残されたTYさんは百歳近い高齢の独居生活となりました。しかも、軽度の夜間せん妄もみられたのです。

TYさんとは長いお付き合いとなり、より大切にしたいと思っていたある日の訪問時のことです。個人的に10年近く前まで親しかった、華やかなファッション関係のオーナーをしていた現在60歳の女性が、何があったのかわかりませんが、

それまでとは異業種のヘルパーさんとなり、TYさん宅で朝食を作っていたのです。その笑顔は他人の空似などではなく、私の知るその人だと確信したのです。まるで演歌の世界のようです。いずれにしても、「人生楽しい」と思えば、味わい深いあらためての出会いとなるのでしょうか。

自宅に帰った私がテレビや新聞に目をやってみると、「中央では、あいも変わらず好景気を演出しているようですが、地方経済は、ますます疲弊し不況感とうつ状態が蔓延している」と解説していました。

しかし、「住めば都」と、私たちは「文化的な生活とすばらしい自然環境に心の充実」が味わえる

生活空間の構築に寄与し、真のノーマライゼーションとしたいとあらためて思っています。

現在、地方創生・地域包括ケアシステムがキーワードです。

また、東京・大阪などの大都会へ、中学卒業後に集団就職し「金の卵」と称された若者たち(団塊の世代)も介護が必要な年齢となりました。国は、2025年問題を見据えて、都会の介護難民のごとく例えられた彼らに、地方への永久帰省大移動をすすめようとしています。

世界の中で、小さな日本経済不況は、国内の私たちに、新たな環境変化による歩みを、無情にも求めているのでしょう。

受け手となった地方の社会保障・介護医療業界は、知恵を出し合い、介護難民の彼らに楽しいパラダイスを提供したいものです。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 21名
(常勤6名、非常勤15名)

内科・外科専門医 18名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア) 相談室開設!

Hyper Blood Viscosity (高血液粘度群)を科学する **臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設**
地方創生「健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>